
RAINBOW STATION

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RAINBOW STATION

【Nコード】

N9630C

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

荒野を進んでいくと一人、また一人と仲間を得て。そうして目指す場所は。チェッカーズシリーズ第二十三弾、彼等の最後の方の名曲です。

第一章

RAINBOW STATION

その線路には電車も何もいなかった。ただ一本の線路が何処までも広がっているだけだった。

「ここを進んでいけばいいんだな」

僕はその線路を見て思った。周りは見渡す限りの荒野で地平線が何処までも広がっている。当然線路の向こうもそうでその先に何かあるのかはわかりはしない。

けれどそれでもよかった。むしろそっちの方がよかった。

「よし」

僕は線路伝いに歩いていくことにした。今そう決めた。

そのまま歩き出す。するとそこに一人やって来た。

「待てよ兄貴」

僕の弟だった。後ろから僕の方に駆けてきたのだ。

「一人で行くなんてずるいぜ」

「御前も来たのか」

弟の方を見て声をかけた。やっと追いついたという感じで肩で息をしていた。背中に持っているサックスがやけに似合っている。

「そうだよ。気付いたら急にいなくなっただからな。探したぜ」

「いや、何となくな」

「そう言葉を返す。」

「この線路の先に何かあるのか見てみたくなっさ」

「行くのかい？」

「ああ」

僕は答える。

「何処まであるのかさ。見てみたくなっさよ」

「じゃあ付き合っよ」

弟はこう言ってきた。

「最後までさ。何があるか見に行こうぜ」

「二人でか」

「一人より二人の方がいいじゃないか」

その言葉には一理あった。僕も頷きざるを得ない言葉だった。

「そうだろ？」

「まあな。じゃあ二人で行くか」

「よし、これで決まりだな」

僕の今の言葉に笑顔で頷いてきた。

「二人でな」

「わかった、じゃあ行くぞ」

二人で歩きだした。やっぱり線路は何処までも続いている。本当に何処まであるかわかりもしない程だ。二人で歩いていると途中に一人いた。髪を伸ばして背中にギターを背負った男だ。何かギターがやけにさまになっている。

「よお」

ギターの男は岩の上に腰掛けている。そこから僕達に手をあげて挨拶をしてきた。

「あんた達何処へ行くんだい？」

「線路の先へ」

僕はそう答えた。

「何処まであるかさ。見てみたくなった」

「そうか、線路の先か」

「ああ。何があるのか気になってさ」

「そうだな。今のところここは荒地ばかりだけれどな」

見渡す限りの荒野だ。赤い土と岩山以外は何も見えはしない。果てに何があるのかわかりはしない。けれど僕は見てみたくなったのだ。

「最後には何があるかな」

「気にならないか？」

「いや、気になる」

男はニヤリと笑ってこう返してきた。

「最後に何かがあるかな。見てみるか」

「じゃあ僕達と一緒に？」

「二人より三人の方がいいだろ」

それが彼の提案だった。言いながら立ち上がった。

「違うか？」

「まあな。けれどな」

ここで僕は弟の方を見た。こいつの意見を聞くことにした。

「御前はどう思う？」

「俺は別にいいよ」

そう僕に答えてきた。

「何かこの人しっかりしてそうだし」

「そうか？」

その言葉には僕は疑問を持った。髪を伸ばしているせいか軽そうな男にしか見えない。僕にはわからないだけかも知れないけれど。

「まあ三人の方がいいじゃない」

ギターの男と同じことを言ってきた。

「そうじゃないかな」

「そうか」

僕もそこまで言われてそれに頷くことにした。

「じゃあ一緒に行ってみるか？」

「ああ、宜しくな」

「ああ」

こうして僕達は三人になった。三人になると今度はやけに話が進むようになった。あれこれ話していると前から一人またやって来た。口髭を生やしたリーゼントの男だ。

「あんた何処へ行くんだい？」

「いやな」

彼はふてくされた顔で僕達に対してきた。

「この線路伝いに旅していたんだけれどよ。何処まで行っても線路

と荒地しかなくてな」

「帰るのか」

「そのつもりだけだよ」

彼はふてくされた顔のまま僕達に言ってきた。

「言っておくけれど先には何も無いぜ。線路と荒地だけだ」

「そうかな」

「そうだよ。だから俺は諦めた」

「おいおい、根性ないな」

ギターがそれを聞いて髭の男に言った。

「簡単に諦めるなんてよ」

「何だと!？」

その言葉を聞いて目を鋭くさせてきた。

「俺が根性なしだっていうのかよ」

「じゃあ最後まで行ったらどうだよ」

ギターは髭にこう言った。

「そうすれば根性あるって認めてやるぜ。どうだ？」

「最後までか」

髭はそれを聞いて睨むのを止めてきた。急に落ち着いた雰囲気になった。それから僕達に対して言ってきた。幾分穏やかな声で。

第二章

「じゃあよ」

「ああ」

僕達はその彼の話を聞く。

「行ってみる。けれどな」

彼は言う。

「あんた達も線路の先目指してるんだよな」

「そうだよ」

僕が答えた。すぐにそう返した。

「君と同じだね」

「そうだよな、同じだよな」

彼はそれを聞いて納得したように頷く。そのうえでまた言ってきた。

「それじゃあな」

「どうしたんだい？」

「俺も一緒に行つていいか？」

そう提案してきた。僕達を見ながら。

「一人でいるとな、寂しくてな」

苦笑いを浮かべて言ってきた。

「けれど四人だとどうかなって思つてな。どうだい？」

「僕はいいよ」

「俺も」

僕と弟はそう答えた。別に仲間が増えて悪いことはない。

「じゃありーダーの俺の意見な」

何時の間にかギターがリーダーになっていた。けれど悪い気はしなかった。むしろ僕よりこいつの方がそういうのに向いているかと思つた。だからそれでよかった。

「いいと思うぜ」

「いいんだ」

「度は道連れって言うだろ？」

それが彼の考えだった。それはそれでいいものだと思
っていた。

「だからさ」

「じゃあそれでいいか。ねえ君」

髭の男に声をかけた。

「一緒に行こう。それでいいね」

「ああ、宜しくな」

こうして髭も僕達の仲間になった。四人になった。僕達はまたあ
れこれと話をしながら先に進んだ。けれどまだ線路の果ては見えな
い。地平線だけが見える。

「本当に何も無いね」

弟がそれを見て呟く。

「何処までも」

「この辺りで引き返したんだよ」

髭はそうぼやいてきた。

「頭にきてな」

「まあ今は四人だししつかり行こうぜ」

リーダーがぼやく彼にそう声をかける。

「一人よりずっと気が楽だろ」

「まあな。おい」

ここで髭は何かを見つけた。

「どうしたの？」

「見るよあれ」

僕にある場所を指差して見るように言ってきた。

「人がいるぜ」

「あつ、本当だ」

見れば横から線路の方に歩いて来ている。色の白い奴だ。見てい
て僕はうと思った。それを言おうとしたところでリーダーのギター

が言った。

「あいつも入れるか？」

「それ言おうと思っっていたんだ」

僕はそう付け加えた。

「先を越されたね」

「悪い悪い、けれど悪い考えじゃないだろ」

リーダーは笑って僕にも他の二人にもそう述べる。

「五人いたらまたいいしな」

「何かどんどん増えるね」

弟はギターのその言葉を聞いておかしそくに笑ってきた。

「嫌か？」

「ううん、別に」

しかしそれは否定する。

「どっちかっていうとそっちの方がいいあし」

「そうだろ。じゃあ決まりだな」

線路をそのまま進むとぼったりと鉢合わせした。そこでリーダーが彼に声をかける。

「俺達と一緒に行かないか？」

「君達旅してるの？」

「ああ、この線路の先までな」

リーダーはそう白に説明した。

「行ってみてるんだ」

「ふうん、面白そうだね」

白はそれを聞いてぼんやりとした様子で応えてきた。

「あのさ、僕も一緒に行っていていい？」

「おっ、乗るか？」

「うん。興味あるし」

何かやる気のないように聞こえるけれど別にそれはよかった。どちらにしろ道連れができるのはそれでよかった。僕としてはむしろ賛成だった。

「じゃあ一緒に行くか」

「うん。最後に何かあるのかな」

「それは行ってみてのお楽しみだね」

僕が彼にそう言った。

「それで行こう」

「うん」

こうして五人、けれどすぐにまた一人と出会う。彼は線路の上に寝そべっていた。どうやらそのまま寝ているらしい。

胸の上にベースを置いてサングラスをかけている。表情は見えないが結構背が高い。寝息すら立ててそこに寝ていた。

「ちよつと」

僕が彼に声をかけた。するとサングラスを外してこちらに顔を向けてきた。

「どうしたんだい？」

「君何でここにいるの？」

「ああ、ちよつと旅をしててな」

そう僕に言ってきた。

「それで一休みしてたんだよ」

「そうだったんだ。それで何処を旅していたの？」

「ずっと先だよ」

身体を起こして背伸びしながら言ってきた。

「ずっと先。この先にな」

胡坐をかいて線路の上に座ってその先を指差す。そこは僕達が向かっているのと同じ場所だった。

第三章

「何だ、一緒なんだ」

「一緒っていうと」

僕はそれを聞いて呟いた。

「この線路の先を旅してるんだね」

「そうさ」

彼はベースを背中にやりながら答えた。

「何処まであるのかな。気になってさ」

「じゃあさ、一緒に行く？」

僕は彼にそう提案してきた。

「どう？」

「そうだな」

立ち上がりながら僕の言葉に応える。

「じゃあいいか？」

「うん、旅はやっぱりさ。多い方がいいし」

「丁度都合がいいしな」

リーダーも笑って頷いてくれた。

「俺がギターだしな。ここでベースも入れば音楽的にも都合がいいし」

「じゃあ問題なしだね」

僕はそれを聞いて述べた。

「それで」

「よし、じゃあ御前もな」

リーダーが彼に声をかけた。

「一緒だ」

「よし」

こうして六人になった。そう、六人だ。

けれど何か足りないような気がしてきた。僕達は一人から六人

になった。けれどまだ誰か、何かが足りない。それについて考えていたらそこで髭が言う。

「もう一人いねえかな」

「もう一人か？」

ベースが彼に顔を向けてきた。

「ああ、今六人だろ」

「そうだな」

「ここにもう一人入ったらラッキーセブンじゃないか」

彼はそう言ってきた。そういえばそうだった。

「七人いればよ。それに」

「ドラムだよな」

弟がふと言った。

「ここは」

「そう、それだよ」

リーダーもそれを聞いて頷く。

「太鼓がいらないんだ。それがいればな」

「といってもさあ」

白がぼやいて上を見上げる。

「こればかりはね。前にいるかどうかで」

「いるぜ」

髭がふと言った。

「何処にだよ」

リーダーがそれを聞いて彼に問う。

「何処にもいないじゃないか」

「あそこでへ垂れ込んでるのがそうさ」

「！？」

リーダーだけでなく僕達も彼の言葉に顔を向けた。見れば丁度岩場で一人太鼓を叩いてるのがいた。何か車掌の服を着ている。

「あいつか？」

「ああ。何か車掌の服着てるな」

髭はリーダーに伝えて述べる。

「いるよな」

「確かにな」

「あいつ、車掌さんみたいだね」

弟が彼を見ながら言う。

「よくわからないけれど」

「よくわからないっていうよりそのものじゃないの？」

白が弟に伝えて言う。皆その車掌の服を着た目の細い顔を見ている。

「やっぱり」

「ドラム、だな」

ベースはふと呟いた。

「だよな」

「ああ、ドラムだ」

僕がそれに頷く。

「決まりだね。なあ」

僕が彼に声をかける。

「あんたどうしてここにいるんだい？」

「俺？」

彼はそれに応えて顔をあげてきた。そして僕達に顔を向けてきた。

「俺さ、実は電車から降りちゃって」

彼は苦笑いを浮かべてこう言ってきた。

「それで今ここで太鼓叩いてたんだ」

「そうだったのか」

リーダーは彼の言葉を聞いて述べた。

「じゃあ暇か？」

「うん、凄い暇」

彼は言う。

「何していいかわからなくてここで太鼓叩いているけれど」

「じゃあ俺達と一緒に来いよ」

リーダーが言った。

「あんた車掌さんなんだろう？じゃあこの線路の先に何かあるのか知ってるよな」

「一応はね」

彼は太鼓を背中にやって立ち上がってそう述べてきた。

「知ってるよ。大きな駅があるんだ」

「駅が」

「うん、オアシスがあってね」

「オアシスが」

それを聞いて僕達は自分の目が輝くのがわかった。荒地ばかり見てきた僕達にとってオアシスという言葉はそれだけで凄く魅力的なものだった。目が輝かずにはいられなかった。

第四章

「そうだよ。そこには楽器も一杯あってね」
また言う。

「歌も歌えるし。水つ気のある美味しい果物も一杯あるし」
「何だそりゃ、天国かよ」

髭がそれを聞いて声をあげた。

「それってよ」

「それ、本当だよね」

弟が車掌に問う。皆同じことを聞きたかった。

「そうだよ。けれどさ、物凄いい先なんだ」

彼はそう述べる。

「本当にさ、気の遠くなる位にね」

「それでもいいよ」

今度は白が僕達の言葉を代弁してくれた。

「ちゃんと最後があってそれが素晴らしいものなら」

「そうだな。絶対に行かないとな」

ベースがそれに頷く。

「じゃああんたは道案内もしてくれ。それで俺達と一緒に来てくれ」
「いいの？」

彼は少し戸惑いを覚えながらも僕達も応えてきた。

「それで」

「いいさ、じゃあいいな」

「うん、じゃあ」

これで決まりだった。彼も僕達の仲間になった。これで七人だ。
「よし、これでいい」

リーダーは七人揃ったところで満足した顔で述べた。僕達は七人横一列になって線路の上を歩いている。中央には僕がいて丁度線路の真ん中を歩いていた。

「七人だ。向こうで歌も歌えるな」

「そうだね」

白がそれに頷いてきた。

「僕はキーボードやるよ」

何と背中からピアノみたいな小さいアコーディオンを出してきた。

「俺はパーカッションな」

髭も楽器を出してきた。

「これで楽器はいい」

「じゃあ歌うのは僕だね」

僕は皆の話を聞いて言った。

「それでいいよね」

「ああ、それでいいぜ」

リーダーがそれに頷いてくれた。

「いい歌聴かせてくれよ」

「うん。それにしてもさ」

僕は言う。

「この道はとても長いけれど」

「うん、まだまだ先だよ」

車掌だったドラムが僕の今の言葉に答える。

「けれどそれが近付いたらね」

「何か見えるのか？」

ベースが彼に問う。

「虹が見えるよ。綺麗な虹の橋が」

「虹がなんだね」

弟はそれを聞いて目を瞠ってきた。

「うん、線路をアーチで囲ってね。見えてくるから」

「まずはそれを見るまでだな」

リーダーは頷く。

「それで行こう。いいな」

「ああ」

「じゃあ」

それから僕達はどれだけ歩いたのかわからない。歩いてても歩いても荒野ばかりだった。靴がすり減るんじゃないかって思える程歩いた。けれどそれが終わる時が遂に来た。

「ほら、あれ」

ドラムが声をあげて空を指差す。青い空の中に白い雲が少し浮かんでいるだけだったその空に。

「見て、やつとだよ」

「おお、やつとか」

僕達はそれを見た。虹のアーチを。今それがやつと見えてきた。

「見えてきたな」

「うん、やつと」

「見えてきたな」

「もうすぐだよ」

ドラムは僕達に言う。

「終着駅は」

「もうすぐか。じゃあ」

「ああ。あと一息だ」

僕達は自分達に対してそう声をかける。

綺麗な大きい虹だった。左右の岩山の上からそのまま出て入るようにしてかかっている。見ているとそこに脚をかけて渡れそうな感じがする。その虹を見て僕達は身体に力がみなぎるのを感じた。僕はその中で皆に対して言った。

「もうすぐだからさ」

「ああ、向こうについたらまず」

髭はその口髭を綻ばせて述べてきた。

「美味しい果物食って喉を潤して」

「それから飽きるまで演奏だな」

「飽きるわけじゃない」

白がリーダーに対して言う。

「だって僕達はその為に来たんだから」

気付いたらそうなっていた。そうさせたのは皆が持っている楽器からだ。僕は声がそれだ。皆それをそれぞれ持っていた。音楽の為に。

「そうじゃない」

「そうか。じゃあ」

「そこには誰がいるかわからないけれどな」

ベースはそう言っても楽しそうだった。

「それでもな」

「うん、それでも」

弟がその言葉に頷く。

「その皆が待っていてくれるんなら」

「待ってるよ、皆」

ドラムがここで言うてくれた。

「誰かが来るのを」

「そうか。何の心配もいらないんだね」

「うん」

そのうえで僕ににこりと笑って答えてくれた。

「だからさ。安心して」

「行くか」

僕達は虹の下にあるその駅に向かってまた歩く。その先に希望があるのだとわかっていているから。七人いれば何も怖くはない。虹の七つの色がそのまま僕達一人一人にかかっているのを見ながら先へ歩いていく。

RAINBOW STATION 完

2
0
0
7
.
2
.
1
2

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9630c/>

RAINBOW STATION

2010年10月8日15時43分発行